
Arms Girl -異界に降り立つ武器使い-

desutoroiya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r m s G i r l ー異界に降り立つ武器使いー

【Nコード】

N 0 6 3 1 V

【作者名】

d e s u t o r o i y a

【あらすじ】

主人公、早乙女^{さおとめ} 真志^{しんじ}は、子供のころはいじめられっこで、いつもからかわれていた。

そんなある日、人生を変える師匠と出会う。

そんな彼が、ある事件に巻き込まれ、異世界に飛ばされる。

ちよつとシリアスなバトルアクション。

第1話、記憶

第一話

俺の名前は早乙女さおとめ 真志しんじ

おれは、夢を見ていた。小学生のころの夢だ。

一人の少年が、泣いていた。そう、自分だ。

まわりには、複数の同じ年が囲っていた。

「おい、おとめ、ほんと、おまえって、弱虫だよな。すぐに泣いてさ、女みたいだな」

囲っていたなかでも、一際大きい存在が、こっちにきた。

「立てよ。まだ遊びは終わってねーんだよ。」

俺は胸ぐらをつかまれた。

「何とか言えよ!!」

「!？」

拳が飛んできたのを、咄嗟に腕を交差し、目を閉じた。

「こらゝゝゝ、いじめるなゝゝゝ!!!」

大きい声でこちらに走ってきた。

「げ、出たよ。凶暴女。おい、逃げるぞ。」

リーダーが合図すると、みんなは一斉に逃げた。

「待ちなさい!!!」

叫んだが、あいつらが止まるはずがない。

俺の隣まで来て止まり、

「まったく!!!、あんたも、そんなクヨクヨしないの、男の子でしょ?」

この、気の強そうな女の子は、名前は「川島 葵」、俺の幼馴染である。

髪の色は、青色で、瞳も、青色。

ポニーテイルをしている。

「うるせえよ・・・構うんじゃねよ・・・」

俺は、顔を抑えながら、立ち上がった。

「ちょっと、助けてあげたんだから、お礼ぐらい言いなさいよね。」

「うるせよ!!!」

俺は、走り出した。

がむしゃらに、走った。

「ちょっと!?!?待ちなさいよ!?!」

無視した。だんだん、声が遠くなった。

俺は自分が嫌いだった。弱くて何もできない自分に・・・
変わりたかった。何もかも、自分という存在を。

途中で雨が降ってきた。

それでも俺は走った。

その途中で俺は転んだ。

くやしかった。涙が全然こらえきれなかった。

「こんなところで泣いていたら車に引かれますよ？」

女の人に、突然声をかけれた。

「うるせえよ、俺の勝手だろ。」

差し伸べてきた、手をどけ、俺立ち上がりうとした。

「あらあら、足けがをしてるんじゃないですか？」

前触れもなく、俺の脚を掴んだ。

「な、今、何が起きたんだ!？」

あまりに突然だったせいで、何が起こったのかわからなかった。

「ふふ、これぐらいなら、絆創膏で大丈夫そうね。」

と、ポケットから絆創膏を貼ろうとした。

「なにかってにしてんだよ!!」

そいつを突き飛ばしたはずだった。

突き飛ばす感触がなかったのだ。

そこには、誰もいなかった。

いや、正確には俺が突こうとした場所に今までいた人物がいなかったってことだ。

「もう、転んでけがをしないようにね。」

俺が突こうとしたさらに向こうにいた。

そして、俺は、はじめて、女の人の顔みた。

すげー美人だった。子供の俺でもすぐにわかるぐらい。

「じゃあね。」

笑顔で去ろうと、したのを、俺はとっさに叫んだ。

「俺、俺を、弟子にしてください!!」

美人だからとかじゃないからな。

そして、俺はこのとき、自分の人生が180度変わった。

高校生になったばかりのころだ。

俺の第二の人生が変わるきっかけとなる事件が起きた。

俺は、師匠との出会いで、変わった。

そう、あの出会いがなかったら、俺はたぶん、自分が嫌いで仕方なかったと思う。

だが、今は、自分に対してそうでなくなっている。

ほんと、すごい変わりようだ、我ながら、笑えてくる。

師匠には感謝しきれないほど、たくさんあるのに、

修行中の出来事だった。突然いなくなったのだ。

最初は放心状態だったが、師匠の言葉を思い出し、冷静を保てた。

でも、さすがに、これは、焦ったよ。

周りを確かめ、置手紙があることが、確認できた。

それを拾い上げ、読んだ。

「『今これを、読んでいるということは、私いなくなったということですね。』」

でもね、シンちゃん、悲しまないで、私は、たぶん旅に行ったのだ
思ってくれたらいいわ。

だから、安心してね。またどこかで会いましょ。」「

「・・・」

師匠と出会って、まず最初にしたのが、

この人、かなりの気まぐれ屋なのだ。

だから、どこかで生きてるだろうと、判断した。

だが、いろいろあったが、こんなことは、初めてだった。

それ以降、連絡が一切取れずにいる状態だ。

「まあそのうち、連絡あるだろ。あの人気まぐれだし、」

と、俺はこれから通うことになる学校に、歩いていた。

「やつほくく、葵さん登場だよ！」

思いつき背中をたたかれた。

「くくッ!？」

言葉にならない痛みがあった。

そう、この世で一番会いたくない相手が来た。

こいつを見ると、惨めだった自分を思い出してしまうからだ。

こいつは、親切心でやってたつもりだっただろうが、

俺にとって、惨めにしかなかった。

昔のことだ忘れよう。そう心で決めたはずだ。

そう気合を入れ、その人物、に返事をした。

「朝から、背中を思いっきりたたくのやめろよ。メチャクチャ痛いんだぞ。」

「何言ってるのよ。あんたがよわっちーからでしょ。」

俺の堪忍袋が一気に切れそうになった。

落ち着け俺、ここでキレても、意味がない。

俺は、変わったんだ。もう昔と違うんだ!!

そう自分の中で、呟いた。

「何ぶつぶつ言ってる早くいこ!、遅刻するよ。」

俺の手を持ち引っ張った。

その時だった。

キキィ——!!!!

「あぶない！！！！！」

すごいブレーキ音と、大きな声が聞こえた。

俺はそれを見るや、全力で走った。

「ちよつと、シンジ!!!」

おれを必死に止めようとしたようだが、俺はもう止まらない。

「間に合え～～！！！！」

俺は何とか、飛びついて、子供の背中を押した。

これで、何とかあったら。次は俺だ。

突き飛ばした方がいいが、どう見てもこの態勢は、動けん。

俺は来るべき衝撃に耐えるべく、頭を抱え、備えた。

全力で、目を開け、トラックとの衝突を判断しようとした。そのときだった。

あと数センチのところで、急に目の前が真っ白になった。

第2話、始まり（前書き）

「ぎゃあああああゝゝゝ！！！！！」

そして、作者の姿は消え、誰も見ることはなかった。

第2話、始まり

第二話

今、目の前が真っ白だ。

たぶんおれは、死んだと、思われる。

しかし、最後に、衝突した感じはしなかったから、どうも不思議でならない。

人間、死ぬときは、一瞬だ。っていうけど、これは明らかにおかしい。

突如、俺は何かに激突した。

「いってゝゝ！！」

唐突すぎで、もろに受けてしまった。

痛いということは、まだ生きている証拠だ。

俺は、がぼっと、起き上がり周りを見た。

微かにぼやける視界を、眺めながら、呟いた。

「ここは・・・？」

だんだんと視界がはっきりいしてきた。

そこには、神殿の中だった。

「ようこそ、天国へ、君を歓迎するよ。」

前の方に、羽の生えた人がいた。

周りを見たが、そいつ以外誰もいなかった。

「あんた、何者なんだ？」

おれが、そいつに聞いてみた。が、

前にいたやつが、いなくなっていた。

「ふっ、遅いな。」

「なッ!？」

俺はとっさに前の方に飛びながら後ろに方向転換した。

あっさりと、後ろを取られたのだ。

「なんなんだよお前は!!」

俺は、戦闘モードにはいった。

「いや、なんていうか、お約束?みたいな?」

へらへらと笑って言った。

「ごめんごめん。脅かすつもりはなかったんだよ?」

「自己紹介がまだだね。私は、神さまだよ」

ピースサイン。

いまいち信用ならないやつだ。相手に戦闘する気はないみたいなので、

話を持ち出した。

「さっき、天国って言ってたけど、俺は死んだのか？」

「死ぬようなことでもしてたの？」

「いや、さっき俺車に引かれそうになってたんだけど・・・」

「適当に、召喚したから、その辺よくわかんないな」

なって、適当なやつなんだこいつ！と、声に出して言いたいが、話が進まなくなるので

ここは、こらえた。

「何のために呼んだんだよ？」

「実はさ、私の手違いでさ、私が作った世界がさ、滅びそう

なのよ」

ウザ!!!!!!!!

なにこのウザさ加減、これ殴っていいよね? いいよね?

「で?」

俺は、イライラしながら、続きを聞いた。

「それでさ、その世界を救ってきてほしいんだよ。」

「断る!!!!!!!!」

「そうか、行ってくれるんだね。さすが、私が選んだだけのこと
はある。」

「断るって言ってるだろ。無視して、話を進めるなよ!!」

俺は怒鳴ったが、聞き耳持たず。

マジで殴りたいんだけど・・・。

こいつの強さはさっきので分かったので、

言うことを聞くしかない。

「そもそも、あんた神さまなんだろう？、だったら、世界の一つや二つぐらい

救えるんじゃないか？」

と、疑問をぶつけてみた。

「うーん、そうなんだけど、なんていうか」

急に歯切れが悪くなった。

「なんなんだよ。」

「ぶっちゃけると、私が手加えたおかげで、滅びそうになってる？
みたいなく」

なんだよそれ、頼りにならん神様だ。

もう切り替えよう。

「その世界が救われたら、元の世界に戻るのか？」

だったら早く終わらせればいい。

方法の一つしかないのだから。

「もちろん、あなたが望めば、戻してあげるよ」

「ただし、お願いは一回だけだから。」

「世界が救われたときに、聞いてあげる。」

「じゃあ、そろそろ、その世界に送るね」

「さてさて、こういう場合、神さまが能力とかくれないのかよ。」

どこかの本で読んだことがある。

こういう場合、たいてい、神さまが能力を与える。

「え〜、ほしいの？」

なんかメツチャ嫌そうにしてるんだけど。

「こちらら、ほぼ無条件で、OKしてるようなもんだぞ！」

怒鳴り散らすと、

「わかった。わかった。あげればいいのよね？」

「はい、あげた。」

手を上に掲げた。

「ガキかお前は！！」

「冗談だつて。で、何がほしいの。」

聞いてきた。

今更ながら、

正直考えてなかった。

「どうしたの？はやく」

「なんもいいのか？」

「なんでもいいよ」

すぐに沈黙。

時間稼ぎにもならない。

「ないなら、私が決めちゃうね」

「おい勝手に決めるなよ！」

言ったが、

「もうおそい」

手の上に、妖精がいた。

神さまがそれを渡してきた。

「私との、連絡用、お助けピクシーだよ」

「俺の能力は？」

「このピクシーだよ」

意味がわからん。

「それは、いらんから、ほかの能力をくれ。」

「だめ、もう決定事項です。」

「じゃあゝがんばってきてねゝ」

「ちょっと待ッ・・・」

急に浮遊感が襲ってきた。

「がんばってきてねゝ」

そう、笑顔で見送られた。

「うわあああゝゝ!!!!」

俺は、落ちて行った。

第3話、出会い（前書き）

d e s u t o r o i y a です。

感想欲しいです。

一言でもいいのでお願いします。

第3話、出会い

第三話

俺は今空を飛んでいる。

なぜ？　と問われても俺にもよくわからない状況だ。

少なくとも丸腰でスカイダイビングを楽しんでいるわけではない。

そう、こうなっているのもあの神さまと名乗るやつのおかげなのだ。

「絶対にぶん殴ってやる。」

だが、まずはこの状況を何とかしないといけないわけであって

殴る殴らないはあとで考えよう。

アホなこと考えてたら結構距離が近づいていた。

「どうすんだよこれ!! 何とかって無理だろこれ!!」

やばい落ちる。

何とか川とかを探したが見渡らない。

このままじゃ死ぬ!! そう頭に過った。

そのときだった。

「ごめんね〜間違えて〜出すところ間違っちゃった。テヘエ（笑）」

神さまの声だった。

「笑ってんじゃね〜よ。どうすんだよこれ! 始まって即終了か!??」

「大丈夫、大丈夫〜安心して落ちてってよ〜」

「安心できね〜あんたの発言自体が、信じられね〜んだよ!!」

「え〜〜だって、神さまだよ? 100%信じられるじゃん」

「そういうしゃべり方が、信じられんから言ってるんだよ。」

「まあ、がんばってね〜」

突然話を切りやがった。

「おい!？」

しゃべってるうちにもう地面がそこにあった。

「や、やば!？」

咄嗟に顔を腕をクロスして守った。

「ドゴッーーーー!!!!」

そして落ちた。

耳鳴りがとてもひどい。

だが、全身の痛さは何もなかった。＞PBR
周りを見渡してみると、土煙だった。

「なんもみえねーよ」

しかし、本当に無事でいられるとは

曲りにも神さまなんだな〜と思った。

「ちょっと失礼ね〜ちゃんとした神さまですよ〜と」

急に入ってきた。つうか、俺の考えたことがわかるのかよ。

「おい、さっきも説明せずに落としやがってもっと穏便にできねーのかよ」

「なにいつてるの？ 穏便だよ〜チョー穏便」

さぞ不思議とばかりに、返事が返ってきた。

もうどうでもいい。こいつとしゃべってたらキリがない。

「そろそろ、神さまの仕事に戻るね〜」

そういうと、声が消えた。

「なんなんだあいつ」

とにかくまずは、状況確認からだ。

あちこち触って確かめた。

「体は無傷だな、あとは、まわりはっと。」

土煙も晴れて、周りが見えるようになった。

俺を中心に小さなクレーターができていた。

「改めて思うと、よく生きてたよ。」

俺は、何とかクレーターから這い上がると、周りを見渡した。

森の中だった。

「まあ、上空から森しかないってのはわかってたからな」

改めて見てみると、森しか見えない。

「はあゝゝゝ、どうすんだよこれから・・・」

黄昏てみたが、解決するはずもなく時間だけが過ぎていくだけだ。

「そういえば、神さまから変なやつもらってたっけな」

そういうと、ポケットから、妖精を取り出した。

「おい、まだ寝てんのかよ。起きろよ。」

「ふぎゅ〜〜」

なんかちょっと潰れているような・・・ウン、気のせいだ。

「おら！さっさと起きろ。」

指で往復ビンタした。

「痛い！やめて！痛いから！」

「お、やつとお目覚めか」

俺はビンタをやめた。

すると妖精がこちらを向き、

「おい、てめえ、あたしの顔に傷がついたらどう責任とってくれんだ？ああ？」

「・・・」

なんか印象が違うんだが気のせいだろうか？

「聞いてんのか？それともアホなのか？」

なんかとてもムカつきます。

「チイツ、これだから、若いもんは」

お前何歳だよ！！

ってツツコンだら負けだろうか？

がまんしようなんか知らんが、俺にも悪いところもあつたはずだ。

穩便に話を持ち込もうと話をしてみる。

「さっきは悪かった。なかなか起きないから、つい」

「つい、で許されると思うなよこのボケ！！」

思いつきり顔面殴られたが、それほど痛くない。

しかし、口悪いなく俺が言うのもなんだけど・・・

最初の可愛い声はなんだったんだろ？

それはさておいて、話を進めなくては、夜になってします。

「まあそれはおいといて君、お助け妖精なんですよ？　だったら町まで案内してよ。」

なるべく優しく話しかけた。

「ああ？　知るか自分で探せ。」

もう殴っていいよね？

神さまといい、こいつといい俺の周りには変なやつが多すぎるぞ。

いや、神さまがろくなやつじゃないから、こいつもろくなやつじゃないんだ。

それなら納得だ。あの神さまだからなく性格もゆがむだろうなく

そんなこと考えつつ、ポケットを探った。

「ほくら、飴ちゃんだよもし言うことを聞いてくれたら、あげちゃうよ」

物で釣る作戦に変更。

「そ、そ、そんなもんで、私が釣られると思うなよ。」

そう言いつつも、目がちらちらとこちらを見ている。

よし、あと一息だな。

「なんだいらないのか〜じゃあ食べちゃおっと〜」>PBR
そういつて飴ちゃんを袋からだし、食べるふりをした。

すると、

「わ〜〜〜!!ダメ〜!食べちゃダメ〜。」

泣きながら、俺にしがみついてきた。

「なんだよ、協力してくれないんだろ?」

俺はそれを見て、ニヤリと笑った。

「協力するから、私に飴ちゃんちょうだい。」

ひくひくと、泣きながら、そう言ってきた。

だんだん罪悪感が湧いてきた。

「最初からそう言えば済んだろうが。」

飴を、妖精に手で渡した。

「ありがとう」

やばい、可愛い。

わあああ、俺は何考えてんだ！

「私、実はいうと、な～んにも知らないの。」

そう言いながら両手で飴を持ちなめていた。

「お前がいる価値ね～じゃね～かよ～!!」

叫ばずにはいられなかった。

「でも、羽があるから上から様子は見られるよ。」

「本当か！？ならさっそく見て来てくれ。」

「わかった」

そういうとふわりと妖精は上昇した。

少し待っていると周りを見てきた妖精が降りてきた。

「どうだった？」

「うーん、見た感じ周りに町はなかったよ」

「そ、そうか・・・」

万事休す。

このまま野宿かくできなくはないが経験上あまりいい感じはしない。

なんせここは世界が違うのだから。

どんな野生の動物や虫がいたもんじゃないからだ。

食べ物だって俺がいた世界とは違うかもしれない。

「とりあえず、歩くか」。

立ち上がり、歩こうとしたとき大きな声が聞こえた。

「キャ~~~~」

叫んだ方からすると結構近い。

俺はダッシュした。

すると、前の方からこちらに走っている女の子を発見した。

後ろにはオオカミが数匹いた。

「キャッ!？」

女の子は足を躓いてしまった。

それを見逃さなかった狼たちが一斉に飛びかかってきた。

「間に合え~~~~!!!!」

俺はなんとか女の子を抱え、避けた。

「あぶなかった〜おい大丈夫か？」

お姫様抱っこした状態で顔覗き込んだ。

「私は大丈夫です。」

ちょっと顔が赤いがまあこの様子だと大丈夫だろ。

狼たちを見た。ざっと5匹か・・・。

5匹程度なら問題ないな。

「立てるか？」

「はい」

そういうと俺は少女をおろした。

「ツツ!？」

少女はよろめいた。

「どうした!？ やっぱり怪我してたか？」

「大丈夫です。気にしないでください。」

そういうと、笑顔で答えた。

不意に狼たちが、襲ってきた。

「空気読めねーやつらだな!！」

俺は、狼の顔面を殴り、流れるように横から来たやつを回し蹴りを食らわした。

ほかの狼たちが倒されたのをみて、後ずさった。

「どうした？もう終いか？」

俺はこっちにこいと手で挑発した。

狼たちは本能的に勝てないと判断し

一目散に逃げてった。

「ふう〜、いっちょ上がり〜」

俺は後ろに振り向き、少女を見た。

「ケガ見せてみる。」

「え？」

俺は少女のところによると

「どこが痛いんだ？」

「えっと・・・、右足を少し捻ったみたい。」

そういうと、俺は右足をみた。

「たしかに捻挫してるな。早めに処置した方がいいな。」

おれは、どうするか迷った。捻挫の初期は冷やした方がいいと、師匠が言ってたっけ。

とにかく探してみよ。

「ちょっとまってろ。」

そういうと、俺は立ち上がり、ポケット探った。飴ちゃんが出てきた。

飴ちゃん？ おお、その手があったか。

「おい妖精。」

「その呼び方いやゝ名前つけてよゝ」

名前つけろって名前なかったのか道理で名乗らなかったわけだ。

「うゝん、アリスでどうだ？」

なんか妖精っぽいから。

「アリス、アリスうん！！いい！！ありがとうゝ」

適当につけたのは黙っておこう。

本人はすごくうれしそうにしているし。

「それより、飴あげるから、川がないか見て来てくれないか？」

「えー！！飴もらえるの！！」

「見て来てくれたらな」

「わかった！見てくる！！」

そういうとすぐさま空へ飛んで行った。

すると、突然声をかけられた。

「あのー、いったい誰と話していたんですか？」

「ん？今、ようせ・・・」

待てよ。少女は妖精が見えていないってことにならないか？

なんせ、俺の周りをうろちよろとしてたんだから気づくはずだ。

なのに聞いてきたっということは、見えていないって結論は出るわけ、

「いやゝ最近独り言多くてゝ」

あははと、笑ってごまかした。

「あの！言うタイミング逃してしまったので今言いますね。」

そう少女は真剣な顔になり、

「先ほどは本当にありがとうございました。あなたがいなければ死んでいました。」

何かお礼がしたいのですが・・・」

「いや、俺は何もしてねゝよ。ちょっと体を動かしたようなもんだし。」

俺は、ありがたい言葉を丁寧に断った。

「そこを何とか本当にお礼がしたいのです。いえさせてください。すごい剣幕で迫られたのでついうなずいてしまった。」

「わあ！ありがとうゝ」

「ただいま」

するとアリスが返ってきた。

俺は小声で

「どうだった？」

「あつたよく私に付いてきて」

「でかした。報酬の飴ちゃんを提供しよう」

そういつて渡した。

アリスはそれを受け取り嬉しそうに舐めていた。

「飴が空を飛んでいます！！」

少女は驚いていた。

そうだった！！見えてなかったんだ。

「こ、これは、そう、ハンドパワーだ。すごいだろ俺！！」

「ハンドパワー？よくわからないけどすごいです。」

何故か拍手をもらった。

「まあそれより近くに川があったから、そこで冷やそう。」

少女を背負って川まで歩いた。

川につき、少女の足を水に浸した。

「ツツ!!」

「我慢しろ。ちょっと時間経ったから治りが遅くなりそうだな。」

突如背後から気配がした。

俺は咄嗟に、戦闘態勢に入った。

「ど、どうしたの？」

「気配を感じた。」

「「ガサガサ」」

確かにいる。しかも嫌な気配だ。まるで生き物ではないような感じだ。

「バサッ!!!」

そして、そいつの姿が現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0631v/>

Arms Girl -異界に降り立つ武器使い-

2011年10月8日10時16分発行